
Eternal...

綾姫

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E t e r n a l . . .

【Nコード】

N 8 7 0 8 A

【作者名】

綾姫

【あらすじ】

神様がいるなら…《どうか…私達を結んで下さい。。。》永遠なんてありえない。でも、信じたくなるくらい、あなたを愛した。

もつと『好き』って言って欲しかった。

もつと『好き』って言えばよかった。

《E t e r n a l》 あなたが私に残してくれた最後の言葉。

《永遠》なんてありえない。でも、それさえも信じたくてしよ
うがなかった。このまま幸せになるって思ってた。あなたは…どう思
てましたか？

《二月》

恋がしたいと言っていた私に友達が紹介してくれた人、それが大介
だった。携帯開けたら『メール一件』の表示、大介からの初めて
のメール。いきなりでびっくりしたけど、心臓はドキドキだった。
その日から毎日、何通も何通もしたね。こんなわがままな私の事、
いい子だと言ってってくれた。嘘でも嬉しかった。

二月も終わりがけた頃、大介の仕事の都合で、三月から当分の間、
連絡が取れなくなるって言われた。もう終わりなんだって、すごい
悲しくなった。大介は私を突き放す様に、冷たい言葉ばかり言っ
て、私も便乗して酷い事を言っ
て、それ以来、連絡を取らなくなった。
取れなかった。

《三月》

自分から言っておいて、毎日悲しくて寂しくてしょうがなかった。
そんな時、私の誕生日に花束が届いた。大介からだった。涙が止ま
らなかった。

「時間を戻せたら」

と何度思っただろう。でも…もう遅かった。 大介の事は忘れようと、忙しい日々を送り、私の中では過去になりつつあった。

《四月》

友達からいきなり言われた。

「大介、元カノと結婚したんだって」

元カノの事、あれだけ嫌って言うておいて結婚したなんて…私は強がってその話題はすぐに流した。大介の結婚は好きでしたんじやなくて、親の都合だと後から聞いた。悔しかった。でも、嫁の腹の中には、大介の子じゃない、別の人の子かいた。嫁は不倫して、その不倫相手の子を身ごもっていた。それを大介は認知した。そんな人の事はもういい。これで完全に割り切った。その思いで一杯だった。

《五月》

私も部活が引退に近づき、そろそろ新しい恋でもしようかと、クラスの子と仲良くなり始めていた。その恋は本気のつもりだった。でも心のどこかに大介が居て、本気になれなかった。どの人を見ても大介と比べてしまつて、どこかで大介以上の人はいないと思つていた。

《六月》

部活も引退し、受験勉強に真剣に取り組むようになった。月日はあつと言つ間に過ぎていった。六月も下旬になり、いつもの様に友達とメールしていた時、

「大介がメールしたいって言うてる」何、今更になつて。でも内心は喜んでいた。

まさか、こんな事があるとは思わなかった。

30日にこつちに帰つてくるという事で、その日にメールが来るはずだった。

29日、早く30日になれ！とワクワクしつ時、『メール一件』の

表示、何気なく開けたら、それは大介からのメールだった。
30日って言うていたのに……心臓が張り裂けそうな位の鼓動が私を襲った。また連絡取れる。大介は前に酷い事言うてゴメン、と言うためにメールしてきた。私が悪いのに。大介からのメール「俺、嫌な事がある度にお前の事思い出す。ずっと好きやった。」涙が溢れた。やつと想いが通じた。でも……時すでに遅し。大介はもう人のモノ。大介の思いもよらぬ一言にびっくりした。《不倫する?》確かにしたい気持ちはあった。でも……怖かった。嫁と言う存在。それから毎日のように連絡を取った。

《七月》

あの時、不倫したいって言うておけば今頃楽しかったかもしれないと後悔する日々。あの日以来、大介が不倫と言う言葉を口にする事はなかった。それでも何度も

「嫁なんかよりずっと好き」

「お前と一緒になりたかった」

と、言うてくれた。

七月の中旬。私は友達と三大祭の一つに行っていた。その祭に大介は行かないと言っていた。せっかく会えると思っていたのに……友達と歩き始めた時、横を若いカップルが通りすぎた。大介っぽかった。でも来ないと言っていたから違うだろうと思った。でも気になり、友達に言われて大介にメールした。

「祭来てる?」

「うん。作業衣やで」

正に、さつきすれ違ったカップルは大介達だった。すごいショックだった。嫁はイケイケのギャル、私とは正反対だった。喪失感に襲われた。友達が

「もう一回みて確かめよう」

と言うて大介達を探し出した。すごい人で全然見つからない。粘って時間もだいぶ経った時、

「もう帰ろう」

と言って帰る途中、前を大介が通った。何のためらいもなく、後ろをついて歩いた。二人を見るのは辛かった。嫁は腕を組み、

「私達お似合いでしょ」

と言わんばかりに歩いていった。あの時、大介はどんな顔してた？楽しかった？

友達が追い掛けすぎて、嫁に目をつけられるようになってしまった。私達に気付いた様に嫁は歩くスピードを上げ、暗い路地に歩いていった。負けずに私達もついて行った。嫁は見せ付けるかのように、手を繋ぎ、ベツタリとくつついた。私は今にも泣き出しそうだった。　「もうこれ以上はいい」

と思い帰った。二人の姿が鮮明に目に焼き付いている。その夜、大介にメールした。でも返ってこなかった。次の日、メールがきた。

《昨日、すれ違ったよな？》私は嘘をついた。《人違いやる。》《ゴメン。二人でおるの見られたら、もうアカンようになるんちゃうかって心配やった。》そんなんで嫌いになるわけないのに。でもやつぱり嫁には勝てないと思った。人前で堂々と手を繋げるのも、イチヤイチャできるのも、嫁しかできない事。いくら大介が私の事を好きと言っても、いくら私が大介を好きと言っても、いくら互いに思いが通じあっても、世間は認めない。悲しかった、悔しかった。でも、何よりも大介が恋しくて、愛おしくてたまらなかった。神様が本当にいるなら……もうわがままは言わない。

だからどうか大介と一緒にさせてください』でも何も変わらず、互いの思いが強くなるばかり……時は無情にも過ぎていった。

大介は七月一杯で今の仕事を辞めて、嫁の実家で仕事をする事になっていた。その関係で、連絡が取れるのは本当に七月一杯だけとなってしまった。ショックにショックが重なり、私は体調を崩した。大介も考え過ぎて体調を崩した。このままだと、二人共潰れてしまう。でも大介は、

「残りの時間を大事にしたい」

と言った。また私は冷たい言葉をいくつも言ってしまった。そうしないと、気持ちが持てなかった。なんでこんなに想い合っているのに、結ばれたらいけないのか。この世を疑った。歩いているカップルを見る度に、若い夫婦を見る度に、大介達と重なり、胸が痛かった。

そして、大介は何も未練がないように去っていった。嫁はお腹に胎児がいるにも関わらず、タバコを吸い、酒を飲み、そのせいで産まれてきた子は発達が遅れていた。大介はその子を一生守り抜くと言っていた。できる事なら子供と代わりたい。

《八月》

今、私は毎日、大介と過ごした日々を思い出す。忘れてたくても忘れられない。忘れたくない。またもしかしたら、あの日の様に、メルがいきなり来るかもしれない。そんな期待を抱かずにはられない。大介は忙しくしているみたいで、私は入試間近になり、毎日勉強に追われている。

《大介》

あなたの中に私はまだ居ますか？もう過去になってしまいましたか？私の中で大介はずっと大きい存在のままです。また出会えるかな？もう一生会う事はないかもね。会ったらまた好きになっちゃう。私に大介以上の人は現れるかな？こう思ってる限り現れないと思うよ。いつか互いに幸せになれるように…。

大介は子供に私と同じ名前を付けました。

だからきつと子供を幸せにする良いパパになると思います。そして子供もきつと幸せになると思います。

（後書き）

これは、今年の話です。今、私は高校三年で、大介は社会人として働いています。不倫は決している事じゃない。でも、好きなモノは好きなんだから…その気持ち、押さえる必要はないと思います。

好きな人には、素直に真っ直ぐに接する方がいいです。後輩はしてほしくない。読みにくい部分がいくつかありましたが、長文読んで頂きありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8708a/>

Eternal...

2011年1月27日03時20分発行